

The Winter's Tale の言葉について

内 山 倫 史

(1)

Shakespeare の “Last Plays” における言葉の多様性については、従来、多くの批評家によって指摘されてきた⁽¹⁾。J. H. Pafford は、*The Winter's Tale* の特質としてその言葉の力強さ、適切さ、音楽美をあげている⁽²⁾。W. H. Clemen は、*The Winter's Tale* のイメージャリーが、ロマンチックで詩的なイメージャリーから現実的なイメージャリーへと極めて広範囲に亘って用いられていることを指摘している⁽³⁾。また、Ernest Schanzer は、この作品が、作中人物や事件が変化に富んでいることと相俟って、特に言葉の華麗さにおいて Shakespeare の傑作の一つに数え上げている。

この小論では、*The Winter's Tale* の主な人物、Leontes, Polixenes, Hermione, Perdita, Florizel の言葉が、性格描写に、また、作品の雰囲気をかもし出すのにどのような役割を果しているか考察を加えてみたい。

(2)

まず、Leontes の言葉を取り上げてみたい。第一幕第二場、妻の Hermione と Polixenes の親しげな様子を見て突然嫉妬にかられる Leontes は、傍白で次のように述べる。

Aside Too hot, too hot !

To mingle friendship far, is mingling bloods.
I have *tremor cordis* on me : my heart dances,
But not for joy - not joy. This entertainment
May a free face put on, derive a liberty
From heartiness, from bounty, fertile bosom,
And well become the agent : 't may, I grant :
But to be paddling palms, and pinching fingers,
As now they are, and making practis'd smiles
As in a looking-glass ; and then to sigh, as 'twere
The mort o' th' deer - O, that is entertainment
My bosom likes not, nor my brows. (I. ii. 109-119)

B. I. Evans は、Hermiones に対する Leontes の嫉妬が *Othello* のテーマに再びもどっていることを指摘しているが⁽⁴⁾、‘too hot’ という言葉の繰り返し、とぎれとぎれのセンテンスやリズムの乱れ、「ため息」を「鹿の死んだ合図の角笛の音」⁽⁵⁾にたとえる奇想、「鹿の角」から、不貞な妻を持った夫の額に角が生えるという連想で用いられた「額」という言葉——この台

詞には、Leontes の激しい嫉妬心が見事に表わされている。更に、'have', 'on' という単音節語にはさまれたラテン語の 'tremor cordis' という言葉の響は、嫉妬に狂う Leontes の心の震えを巧みに伝えている。

Leontes の台詞は行を追うごとに激しさを増し、「不貞の妻を持つ夫」(cuckold) のテーマが続けられる。同幕同場, Polixenes, Hermione, 家来達が退場したあとの Leontes の傍白をみてみよう。

Inch-thick, knee-deep ; o'er head and ears a fork'd one.
 Go, play, boy, play : thy mother plays, and I
 Play too ; but so disgrac'd a part, whose issue
 Will hiss me to my grave : contempt and clamour
 Will be my knell. Go. play, boy, play. There have been,
 (Or I am much deceiv'd) cuckolds ere now,
 And many a man there is (even at this present,
 Now, while I speak this) holds his wife by th' arm,
 That little thinks she has been sluic'd in 's absence
 And his pond fish'd by his next neighbour, by
 Sir Smile, his neighbour : nay, there's comfort in't,
 Whiles other men have gates, and those gates open'd,
 As mine, against their will. (I. ii. 186-198)

この台詞では、語、文のリズム、言葉の繰り返し、比喩などによって、Leontes の内面の苦悩が効果的に描き出されている。まず、'fork'd one' という言葉で不貞妻の夫の角がほのめかされると、191行目で 'cuckold' という言葉によって具体的に実体が示されている。また、コンマ、セミコロ、コロンの多いこの不規則な文、「自分の退場は墓場までヒューヒュー罵られる」とか、「軽蔑の騒ぎが私の葬いの鐘」という誇張表現によって、Leontes の心のいらだちが鮮かに表わされている。更に、'play' という言葉の反復⁽⁷⁾、卑猥な意味を含む 'sluic'd', 'gates' という比喩により一層 'cuckoldry' のテーマが強調されている。

Leontes の激しい嫉妬の叫びは、同幕同場の次の台詞で頂点に達する。

Is whispering nothing ?
 Is leaning cheek to cheek ? is meeting noses ?
 Kissing with inside lip ? stopping the career
 Of laughter with a sigh (a note infallible
 Of breaking honesty) ? horsing foot on foot ?
 Skulking in corners ? wishing clocks more swift ?
 Hours, minutes ? noon, midnight ? and all eyes
 Blind with the pin and web, but theirs ; theirs only.
 That would unseen be wicked ? is this nothing ?
 Why then the world, and all that's in't, is nothing,
 The covering sky is nothing, Bohemia nothing,
 My wife is nothing, nor nothing have these nothings,

If this be nothing. (I. ii. 284-296)

ここにみられる言葉の移り変わりの早さ、疑問符の多い文、云わばたたきつけるような 'nothing'⁶⁾ という言葉の反復——これらによって、Leontes の病的な心、この世の一切のものに対する彼の懐疑、虚無観が伝えられている。

W. H. Clemen は、*The Winter's Tale* の第一幕で、Leontes の次第につのる妄想が、「病気」のイメージや、それに関連のある毒殺、むかつき、不潔物を表わすイメージで描写されていると述べているが⁹⁾、病的な彼の言葉は、更に、「腐敗」のイメージや刺す動植物のイメージで満たされる。第一幕第二場、Polixenes の毒殺を家臣 Camillo に命じ、それを反対された時の Leontes の言葉を取り上げてみたい。

Make that thy question, and go rot !

Dost think I am so muddy, so unsettled,
To appoint myself in this vexation ; sully
The purity and whiteness of my sheets,
(Which to preserve is sleep, which being spotted
Is goads, thorns, nettles, tails of wasps)
Give scandal to the blood o' th' prince, my son,
(Who I do think is mine and love as mine)
Without ripe moving to 't ? (I. ii. 324-332)

R. A. Foakes は Shakespeare の戯曲では、或る幕、場に或るイメージが集中して用いられすぐれた機能を果していることを指摘しているが¹⁰⁾、この台詞の 'rot', 'sully', 'spotted', 'scandal' という「汚れ」のイメージは、Leontes の病める心を、また、「純白な寝床」を汚す「いばら」、「いらくさ」、「蜂のしっぽ」という刺す植物、動物のイメージは、彼の全身を突き刺す苦悩をあますところなく伝えている。

第一幕第二場の「病気」、「汚れ」、「刺す」イメージは、第二幕第一場の Leontes の最初の長い台詞の中に一そう激しさを加えてあらわれる。Antigonus や貴族たちと一緒に登場した彼は、貴族一から Camillo たちの逃亡をきくと次のように叫ぶ。

There may be in the cup

A spider steep'd, and one may drink, depart,
And yet partake no venom (for his knowledge
Is not infected) ; but if one present
Th' abhorr'd ingredient to his eye, make known
How he hath drunk, he cracks his gorge, his sides,
With violent hefts, I have drunk, and seen the spider. (II. i. 39-45)

これまでの Leontes の言葉の特徴、つまり、一つの考えを最後まで述べるのではなく、言葉が次々と急速に移り変わるのとはことなり、この台詞では、「盃の中の蜘蛛」というグロテスクなイメージが中心に置かれ、その中味を飲んだ時の状態が克明に描写され、そのため、苦しむさまが鮮烈に伝えられている。「喉をかきむしり、脇腹をかきむしって、烈しく吐き気をもよおす」という言葉には、Leontes 呪詛の声がリズムにのって溢れ出ている。

Leontes の心の転換の時期は、第三幕第二場、Apollo の神託を「偽り」と冒瀆して、その直後、息子 Mamillius と妃 Hermione が亡くなったという知らせを受けた時である。彼は、「アポロ！ 許し給え！ あなたに対してなした私のはなほだしい冒瀆を！」(III. ii. 53-54) と自らの罪を悔いるが、それと共に、彼の言葉にも変化があらわれる。同幕同場、Paulina の激しい非難を甘受した彼の言葉をみてみたい。

Prithee, bring me

To the dead bodies of my queen and son :
 One grave shall be for both : upon them shall
 The causes of their death appear, unto
 Our shame perpetual. Once a day I'll visit
 The chapel where they lie, and tears shed there
 Shall be my recreation. So long as nature
 Will bear up with this exercise, so long
 I daily vow to use it. Come, and lead me
 To these sorrows. (III. ii. 234-243)

この台詞には、激しい言葉、誇張表現、奇想、病的なイメージは一つもなく、全体のリズムは静かに流れ、悔い改める Leontes の気持があますところなく伝えられている。J. H. P. Pafford は、'recreation' (240行) という言葉には「気晴らし」と「精神の再生」の意味が、また 'exercise' (241行) という言葉には「肉体の仕事」と「苦行」の意味が含まれていることを指摘しているが、この殆ど祈りに近い台詞には、'Last Plays' のテーマの一つである再生——Leontes の精神の再生がほのめかされている。

最後に、第五幕第一場、Florizel と Perdita を迎える Leontes の言葉を取り上げてみよう。

The blessed gods

Purge all infection from our air whilst you
 Do climate here ! You have a holy father,
 A graceful gentleman ; against whose person
 (So sacred as it is) I have done sin,
 For which, the heavens (taking angry note)
 Have left me issueless : and your father's blest
 (As he from heaven merits it) with you,
 Worthy his goodness. What might I have been,
 Might I a son and daughter now have look'd on,
 Such goodly things as you ! (V. i. 167-177)

ここでは、「病氣」のイメージも第三幕第二場以前の機能とは反対の役割を演じ、「悪疫からこの国を清め給わんことを」(167行—168行) という Leontes の祈りに用いられている。更に、「祝福にみちた」(167行)、「神聖な」(169行)、「徳の高い」(170行)、「恵まれた」(174行)、「徳にふさわしい」(175行) という形容詞の頻出するこの台詞、装飾のない清澄な文体によって、Leontes 悔悟の気持がはっきりと示されている。この平易、素朴な言葉こ

そ、Leontes の精神の再生をあらわすのにふさわしいものである。

(3)

次に Polixenes の言葉に考察を加えたい。まず、第一幕第二場、劈頭の彼の台詞をみてみよう。

Nine changes of the watery star hath been
The shepherd's note since we have left our throne
Without a burden. Time as long again
Would be fill'd up, my brother, with our thanks ;
And yet we should, for perpetuity,
Go hence in debt : and therefore, like a cipher
(Yet standing in rich place) I multiply
With one 'We thank you' many thousands moe
That go before it. (I. ii. 1-8)

Nevill Coghill は、Polixenes が宮廷人の賛辞の芸術家であることを指摘しているが⁽²⁾、この台詞は宮廷人の言葉らしく極めて形式的でありまた優雅でもある。「私が王様をお訪ねして9ヶ月になります」という主旨のことを、「こちらに参ってから、水もしたたる月は9たび変り」という華麗な表現を用いたり、感謝の気持を表わすのに、「幾けたも重なった零の上に、更にもう一つ零を重ねるように、己にある何千もの感謝に、もう一つ感謝を重ねる」という奇想を用いている。更に、宮廷を背景としたこの台詞に、「羊飼い」という言葉があらわれ、己に第4幕の主題である牧歌的な雰囲気⁽⁴⁾が顔をのぞかせている。また、「9」という「神秘的な数」や、変り易さや狂気の象徴としての「月」という言葉で、Leontes の突然の狂気のような嫉妬心がほのめかされている。一見この穏やかな台詞は、己にこの作品全体の基調を打ち出しているのである。

ついで Polixenes は次のように話し続ける。

I am question'd by my fears, of what may chance
Or breed upon our absence ; that may blow
No sneaping winds at home, to make us say
'This is put forth too truly'. Besides, I have stay'd
To tire your royalty. (I. ii. 11-14)

Polixenes のこの台詞は自国の Bohemia のことに言及しているように見えるが、これから Sicily で起こることを考え合わせると、極めてドラマチック・アイロニーとなっている。「私は心配で苦しめられています」という言葉は、これから突然起る Leontes の嫉妬に関係しているし、また、「烈しい波風」は、Bohemia ではなく Sicily で吹きまくるのである。

さて、Leontes の激しい嫉妬心が「病氣」のイメージで巧みにあらわされていることは前に述べたが、そのイメージは Polixenes の台詞にも入り込むようになる。同幕同場、Camillo から Leontes が毒殺を命じたと聞かされた時の Polixenes の台詞をみてみたい。

O then, my best blood turn
 To an infected jelly, and my name
 Be yok'd with his that did betray the Best !
 Turn then my freshest reputation to
 A savour that may strike the dullest nostril
 Where I arrive, and my approach be shunn'd,
 Nay, hated too, worse that the great'st infection
 That e'er was heard or read ! (I. ii. 417-423)

今までの穏かな台詞と打って変わったこの台詞には、友の裏切りによる Polixenes の内心の苦悩がありありとあらわれている。頻出する「病氣」のイメージ、更に、キリストの裏切り者ユダと病める肉体との結びつきによって、Frank Kermode の言葉を借りれば¹⁰⁾、「平和と丁重なもてなしが、ユダの裏切りにも比せられる病める情熱の嵐に吹き飛ばされる様子」が見事に描き出されている。また、「いと高き方を裏切った者」(419行)つまりユダが、後に自分の罪を悔いたことを考え合わせると、この台詞にも「再生」のテーマがほのめかされていることは注目に値する。

次に Polixenes が登場するのは第四幕第二場になってからである。彼は、王子 Florizel が身分の卑しい羊飼いの娘を愛しているらしいのが気がかりで、Camillo と共に変装して「毛刈り祭」(sheep-shearing) に羊飼いの家へ出かける。第四幕第四場で、自然と人工のわざについて Perdita 議論する彼の言葉を取り上げてみたい。偉大な造化の自然に人工のわざが加えられるのを嫌う Perdita に対し Polixenes は次のように説明する。

Say there be ;
 Yet nature is made better by no mean
 But nature makes that mean : so, over that art,
 Which you say adds to nature, is an art
 That nature makes. You see, sweet maid, we marry
 A gentler scion to the wildest stock,
 And make conceive a bark of baser kind
 By bud of nobler race. This is an art
 Which does mend nature - change it rather - but
 The art itself is nature. (IV. iv. 88-97)

Polixenes の言葉の特徴の一つにドラマチック・アイロニーがあることを前に指摘したが、「接ぎ木」のイメージで結婚のことを述べるこの台詞にもそれがあらわれている。彼は王子 Florizel と卑しい羊飼いの娘との結婚に反対しているにもかかわらず、「我々はうまれる良い若枝を野生の台木と結婚させて、高貴な血統の芽によって、より卑しい木に子を宿らせることがあるのだ」と言っている。更にここにみられる 'nature' と 'art' の繰り返しや、平易な散文とも言えるこの Polixenes の文体は、素朴な羊飼いの娘に語りかけるのに極めてふさわしいものであり、また、「植物」のイメージの多用により、牧歌的な雰囲気もかもし出されている。

最後に、同幕同場、王子 Florizel が、父の承諾なしに Perdita と結婚することを聞き、変

装をぬぎ、激怒する Polixenes の言葉のみてみよう。

Pol. Mark your divorce, young sir,
Whom son I dare not call ; thou art too base
To be acknowledge'd : thou a sceptre's heir,
That thus affects a sheep-hook ! Thou, old traitor,
I am sorry that by hanging thee I can
But shorten thy life one week. And thou, fresh piece
Of excellent witchcraft, who, of force, must know
The royal fool thou can'st with. —

Shep. O, my heart !

Pol. I'll have thy beauty scratch'd with briars and made
More homely than thy state. For thee, fond boy,
If I may ever know thou dost but sigh
That thou no more shalt see this knack (as never
I mean thou shalt), we'll bar thee from succession ;
Not hold thee of our blood, no, not our kin,
Farre than Deucalion off : mark thou my words ! (IV. iv. 419-432)

これは Polixenes がこの作品の中で発する唯一の激しい言葉である。然し、この台詞には、第三幕第二場前の嫉妬に狂う Leontes の言葉の特徴——きれぎれの文、嫌悪をもよおすイメージ、奇想、誇張表現であらわされる激しさがみられない。羊飼いを「しばり首にして一週間生命をちぢめてやればいいのに」とか、Perdita を魔術に上達している奴と呼んで、「お前の美しい顔をいばらでひっかいてやる」とか、牧歌的雰囲気为背景とした極めて素朴な怒りの言葉である。然し、この台詞によって、Polixenes の性格にも欠点のあることが示され、この作品のテーマが「再生」であることを考えると Polixenes のこの言葉は効果的な役割を果たしている。

(4)

次に、Hermione の言葉に移りたい。Hermione はこの作品のテーマにふさわしい宗教的な雰囲気こそなえていて、彼女について語る人や彼女自身の言葉の中には、敬虔な言葉が頻出する。Polixenes は、「わがいとも神聖な王妃様」(my most sacred lady) (I. ii. 77) と彼女に話しかけているし、彼女自身も 'grace' という言葉をたびたび用いている⁹⁹。一例として、第一幕第二場、Polixenes を言葉巧みに引きとめ、夫 Leontes から「これ程うまく言葉を使ったことは一度しかなかった」(I. ii. 88-89) と言われ、その一度が何時か尋ねる時の彼女の台詞を取り上げてみよう。

My last good deed was to entreat his stay :
What was my first ? It has an elder sister,
Or I mistake you : O, would her name were Grace ! (I. ii. 97-99)

前の一度が「お恵みでありますように！」とはっきりと自分の行為を ‘grace’ と結びつけている。夫 Leontes が「お前が、永久にあなたのものと言ってくれた時」(I. ii. 104) と答えると、彼女は、すかさず、「それこそお恵みでございます」(I. ii. 105) と述べている。彼女は ‘grace’ のシンボルである。

L. S. Champion は、Leontes の嫉妬の激しさの為に、彼をとりまく人物が平板にみえることを指摘しているが⁹⁹、Hermione の現実感が稀薄であるのは、彼女が ‘grace’ のシンボル、貞節、忍耐のシンボルのような存在だからである。

第二幕第一場、貴族達の前で、夫 Leontes から不貞の罪を帰せられる彼女は、平静に次のように答える。

There's some ill planet reigns :

I must be patient till the heavens look
With an aspect more favourable. Good my lords,
I am not prone to weep, as our sex
Commonly are ; the want of which vain dew
Perchance shall dry your pities : but I have
That honourable grief lodg'd here which burns
Worse than tears drown : beseech you all, my lords,
Shall best instruct you, measure me ; and so
The king's will be perform'd. (II, i. 105-114)

この台詞は、Leontes の激しい台詞と対照的である。W. H. Clemen は、嫉妬に狂う Leontes の内心をあらわす「病氣」のイメージが他の人物の台詞の中に入り込んでいることを例証しているが¹⁰⁰、Hermione の言葉は少しも影響を受けることがない。平易な散文ともいべき言葉で、静かに流れるこの台詞は、「胸の中は名誉¹⁰¹ある悲しみ」(111行)をひめて、すべて星回りのせいにして、じっと耐えている忍耐そのものの彼女の性格を見事に描き出している。

更に、第三幕第二場、裁判の場で、自分の無罪を説明する Hermione の弁明をみてみよう。

Since what I am to say, must be but that
Which contradicts my accusation, and
The testimony on my part, no other
But what comes from myself, it shall scarce boot me
To say 'not guilty' : mine integrity,
Being counted falsehood, shall, as I express it,
Be so receiv'd. But thus, if powers divine
Behold our human actions (as they do),
I doubt not then but innocence shall made
False accusation blush, and tyranny
Tremble at patience. (III. ii. 21-32)

Hermione のこの台詞は、敬虔で、冷静、忍耐の化身の彼女の姿をあますところなく伝えて¹⁰²いる。無罪になる希望を一つづつ捨てすべて神に助けを求めるこの台詞¹⁰³、「神が見ておら

れるなら」と一旦述べ、カッコで「たしかに見ておられますが」と強調して神への信頼を固める²³この台詞、「横暴」が「忍耐の前で打ち震えるであろう」という忍耐そのものの彼女の台詞は、役人の読む散文の起訴状と Leontes の激しい台詞の間にはさまれ一層効果的である。

Hermione が最後に登場するのは、第五幕第三場である。彼女は生きた像となってただ一度次の台詞を述べるだけである。

You gods, look down,
And from your sacred vials pour your graces
Upon my daughter's head ! Tell me, mine own,
Where hast thou been preserv'd ? where liv'd ? how found
Thy father's court ? for thou shalt hear that I,
Knowing by Paulina that the Oracle
Gave hope thou wast in being, have preserv'd
Myself to see the issue. (V. iii. 121-127)

ここにみられる「神々」、「神聖なるびん」、「お恵み」、「ご神託」という言葉の頻出は、“grace”のシンボルである Hermione の最後の言葉として、また、この作品の最後の場として、極めて重要な役割を演じている²⁴。

(5)

最後に、Perdita と Florizel の言葉を考察してみたい。Perdita が第四幕第四場で最初に登場すると、Elorizel は彼女に次のように語りかける。

These your unusual weeds, to each part of you
Do give a life : no shepherdess, but Flora
Peering in April's front. This your sheep-shearing
Is as a meeting of the petty gods,
And you the queen on't. (IV. iv. 1-4)

E. M. W. Tillyard は、Perdita が生きた人間であると同時にシンボルであることを指摘しているが²⁵、彼女は「四月のはじめに姿をのぞかせる花の女神フローラ」なのである。また、創造力、再生の象徴でもある。ここで同幕同場、変装した Polixenes と Camillo に挨拶する彼女の言葉を取り上げてみたい。

Sir, the year growing ancient,
Not yet on summer's death nor on the birth
Of trembling winter, the fairest flowers o' th' season
Are our carnations and streak'd gillyvors,
Which some call nature's bastards : of that kind
Our rustic garden's barren ; and I care not
To get slips of them. (IV. iv. 79-84)

「夏」と「冬」, 「生」と「死」を連続したものに結びつけるこの牧歌的で美しい台詞は, 再生の象徴 Perdita に極めてふさわしいものである。

また, 同幕同場, 彼女は次のように述べて, 毛刈り祭に集った客人に花を与える。

Here's flowers for you :

Hot lavender, mints, savory, marjoram,
The marigold, that goes to bed wi' th' sun
And with him rises, weeping : these are flowers
Of middle summer, and I think they are given
To men of middle age. (IV. iv. 103-108)

ここに次々とあげられるそれぞれの花の言葉の響きは美しく, 更に, 中年の客に「真夏の花をさし上げましょう」という台詞により, ここにも人生の「再生」のテーマがうかがえる。

更に, 同幕同場, Florizel, Mopsa, その他の娘に花を与える彼女の台詞をみてみたい。

O Proserpina,

For the flowers now that, frightened, thou let'st fall
From Dis's waggon! daffodils,
That come before the swallow dares, and take
The winds of March with beauty ; violets, dim,
But sweeter than the lids of Juno's eyes
Or Cytherea's breath ; pale primroses,
That die unmarried, ere they can behold
bright Phoebus in his strength (a malady
Most incident to maids) ; bold oxlips and
The crown imperial ; lilies of all kinds,
The flower-de-luce being one. O, these I lack,
To make you garlands of ; and my sweet friend,
To strew him o'er and o'er ! (IV. iv. 116-129)

このゆったりとしたリズムで流れる台詞, いろいろの花が, それぞれ, ある連想を伴って頻出するこの台詞, ギリシャ・ローマの神話の神々が次々にあらわれ, 牧歌的の雰囲気高め, 同時に「再生」の主題をも強調しているこの台詞——これは, 花の女神 Flora であり, また, 「再生」の象徴でもある Perdita にとって, まことに適切な台詞である。

最後に Florizel の Perdita への恋を語る言葉を簡単にみてみよう。まず, 第四幕第四場, Florizel と結婚できないのではないかと心配する Perdita をなだめる時の彼の台詞を取り上げてみたい。

Apprehend

Nothing buy jollity. The gods themselves,
Humbling their deities to love, have taken
The shapes of beasts upon them : Jupiter
Became a bull, and bellow'd ; the green Neptune

A ram, and bleated ; and the fire-rob'd god,
 Golden Apollo, a poor humble swain,
 As I seem now. Their transformations
 Were never for a piece of beauty rarer,
 Nor in a way so chaste, since my desires
 Run not before mine honour, nor my lusts
 Burn hotter than my faith. (IV. iv. 24-34)

Shakespeare の 'Last Plays' には、神話の神々がしばしばあらわれ、劇の雰囲気を高めるのにすぐれた機能を果しているが⁷⁾、この Florizel の台詞も、前にあげた Perdita の台詞同様、牧歌的な雰囲気を高めている。更に、神々でさえ恋のために獣の形に身をやつすことを引きあいに出し、その神々も「僕程、世にも類いまれな美人のために身をやつされたことがない」と自分の恋の激しさを強調している。

Florizel の Perdita への清らかな恋心は、次の台詞で最高潮に達する。

What you do,
 Still betters what is done. When you speak, sweet,
 I'd have you do it ever : when you sing,
 I'd have you buy and sell so, so give alms,
 Pray so, and, for the ord'ring your affairs,
 To sing them too : when you do dance, I wish you
 A wave o' th' sea, that you might ever do
 Nothing but that, move still, still so,
 And own no other function. (IV. iv. 135-143)

James Smith は、この台詞が Shakespeare の韻律の傑作の一つだと述べているが⁸⁾、Florizel の言葉は「海の波」のリズムをおびて流れ、また、Perdita 自身、永遠に動き続ける「海の波」にたとえられている。Florizel にとっては、彼女のあらゆる動作が完璧に見え、まるで女王なのである。この牧歌的な背景の中での Florizel と Perdita の清らかな恋によってこそ、失われた秩序の回復、悲劇の和解、精神の再生があるのである。

(注)

- (1) E. M. W. Tillyard, *Shakespeare's Last Plays* (London, 1938), S. L. Bethell, *The Winter's Tale, A Study* (London, 1947), G. Wilson Knight, *The Crown of Life* (London, 1947), D. A. Traversi, *Shakespeare: The Last Phase* (London, 1955), M. M. Mahood, *Shakespeare's Word-play* (London, 1957)
- (2) J. H. Pafford (ed.), *The Winter's Tale (The Arden Shakespeare)*, (London, 1963), p. lxxxiv.
- (3) W. H. Clemen, *The Development of Shakespeare's Imagery* (London, 1951), p. 195.
- (4) Ernest Schanzer (ed.), *The Winter's Tale (New Penguin Shakespeare)* (Penguin Books, 1969), p. 46.
- (5) B. I. Evans, *The Language of Shakespeare's Plays* (London, 1952), p. 180.

- (6) A. Quiller-Couch & J. Dover Wilson (edd.), *The Winter's Tale (The New Shakespeare)*, (Cambridge, 1931) の中で、編者は 'deer' と 'dear' の地口を指摘して次のように述べている。"A quibble upon 'dear' is intended, and Leontes hints that Hermione's sigh denotes complete surrender and the end of the chase." (p. 133)
- (7) M. M. Mahood は *Shakespeare's Wordplay* (London, 1957) の中で Leontes のこの台詞の 'play' の二重の意味について次のように述べている。"Go and amuse yourself; your mother is also pretending to play by acting the kind hostess, but I know that she is a real daughter of the game and up to another sport which makes me act the contemptible role of the deceived husband. So for the moment I'm playing her like a fish ("I am angling now") by giving her line." (p. 149) また Anne Richter は *Shakespeare and the Idea of the Play* (London, 1962) の中でこの作品の 'Play' という言葉に言及して "The theatrical imagery of *The Winter's Tale* is perhaps even more expressive than that of *Cymbeline*." と述べている。(p. 196)
- (8) G. Wilson Knight は *The Crown of Life* (London, 1948) の中で、'nothing' という言葉が Shakespeare のいくつかの作品において如何に重要な役割を果しているかを例証している。(p. 82)
- (9) W. H. Clemen, *op. cit.* p. 196.
- (10) R. A. Roakes, "Sugestions for a New Aproach to Shakespeare's Imagery", *Shakespeare Survey* 5 (Cambridge, 1952), pp. 84-85.
- (11) J. H. P. Pafford, *op. cit.* p. 66.
- (12) Nevill Coghill, "Six Points of Stage-Craft in *The Winter's Tale*", *Shakespeare Survey* 11 (Cambridge, 1958), p. 32.
- (13) C. Wilson Knight, *op. cit.* p. 88. D. A. Traversi は *Shakespeare: The Last Phase* (London, 1955) の中で、この台詞について "To read this as no more than a conventional expression of royal gratitude is largely to miss the point of the whole utterance." と述べている。(p. 109)
- (14) 牧歌的雰囲気は同幕同場の Polixenes の次の台詞にもあらわれている。
- We were as twinn'd lambs that did frisk i' th' sun,
And bleat the one at th' other: what we chang'd
Was innocence for innocence: we knew not
The doctrine of ill-doing, nor dream'd
That any did, Had we pursu'd that life,
And our weak spirits ne'er been higher rear'd
With stronger blood, we should have answer'd heaven
Boldly 'not guilty', the imposition clear'd
Hereditary ours. (I. ii. 67-74)
- (15) *Shakespeare: The Writer and His Work* (Longmans, 1964), pp. 393-394.
- (16) "Grace to boot!" (I. ii. 80), "this action I now go on/ls for my better grace." (II. i. 121-122) など参照。
- (17) L. S. Champion, *The Evolution of Shakespeare's Comedy* (Harvard U. P., 1970), p. 162.
- (18) W. H. Clemen, *op. cit.* p. 198.
- (19) F. C. Kolbe は、*The Shakespeare's Way* (London, 1930) の中で次のように述べている。"The theme of *The Winter's Tale* is the Honour (Honesty) which breeds Affection and results in absolute Trust." (p. 100)
- (20) F. E. Halliday は *The Poetry of Shakespeare's Plays* (London, 1954) の中でこの台詞について次のように述べている。"Here the bleakness of the diction is emphasized by the free use of

light and weak endings - *that, and* - completely breaking down the architectural form of the verse by sweeping one line into another without any definition of pause. "(p. 181)

- ②1) Miriam Joseph は, *Shakespeare's Use of the Arts of Language* (Columbia, 1947) の中でこの台詞について次のように述べている。"Apocarteresis is the casting away of all hope in one direction and turning to another for aid, as when Hermione, seeing that Leontes is preconvinced of her guilt, turns her hope to the gods." (p. 18)
- ②2) A. Quiller-Couch & J. Dover Wilson (edd.), *op. cit.* の中でこの箇所を次のように説明している。"Brackets add great emphasis to these words." (p. 151)
- ②3) Martin Lings は, *Shakespeare in the Light of Sacred Art* (London, 1961) の中で次のように述べている。"Her appearance in the last scene has therefore the implicit effect of raising that scene to a celestial place." (p. 109)
- ②4) E. M. W. Tillyard, *op. cit.* p. 44.
- ②5) D. A. Traversi は, この台詞について詳しく検討している。(*op. cit.* p. 145)
- ②6) F. E. Halliday は, この台詞を次のように見事に分析している。"*Daffodils*, like a bow drawn at the end of the short line, followed by the leaping swallow flight and the breathless *beauty*; the shy withdrawal of *violets dim*, suggested by the sudden drop to the monosyllable and thin vowel; the whole bound together by the interplay of the short and long *i's*, by the assonance of *flowers, swallow, sweeter, sweet friend, strew him*, and by the more prolonged echo of phrases, 'take the winds of March', 'lack to make you garlands'. (*op. cit.* p. 180)
- ②7) M. M. Mahood この台詞について, 次のように述べている。"These lines, based on a section of Green's *Pandosto* which Shakespeare did not utilise in any other way, have a particular aptness to the holiday mood of this feast. Even the Gods are at play. Jupiter and Neptune become the horned animals in which Leontes saw only the symbol of human bestiality and cuckoldry, and their bellowing and bleating evoke the laughter which is lacking in Leontes, who cannot play. (*op. cit.* p. 158)
- ②8) James Smith, *Shakespearian and Other Essays* (Cambridge, 1974), p. 153.